山崎恭平著

『インド経済入門——動き出した最後の巨大市場——』

日本評論社　1997年　x＋170ページ

内川秀二

本書は1991年以降の経済改革の中でインドの経済政策がどのように変化したか，そしてどのような変化をもたらしているのかを，日本での先行研究を踏まえながら，分かりやすく解説した入門書である。1991年までにインドがとってきた経済政策の特徴と経済改革後の変化が対照的にうまくまとめられている。インドについて基礎知識を持たない人にも分かるように，インドの地理的特徴を説明するといった配慮もなされている。

さらに，今や重大な問題となっている環境汚染，アジア NIES と ASEAN からの直接投資の流入といった新しい潮流にも言及されている。直接投資の流入は経営資源の移転をもたらし，国際競争力向上に貢献するため，インド経済の成長要因になるという見解が示されている。そして，東アジア経済の成長のダイナミズムがインドにも波及し，南アジアと東アジアが結びついた広域の「アジア経済圏」が形成されるという展望が示されている。

本書の意義を認めた上で，以下著者の議論に異論を唱えたい。本書はインドが経済改革に踏み切らざるをえなかった直接的原因として湾岸戦争による経済危機と政治的混乱を指摘し，さらにそれをもたらした原因を構造的要因に求めている。著者の見解をまとめると，以下のようになる。

インドでは独立後産業ライセンス制度によって民間部門の投資を規制する一方で，輸入ライセンス制度によって原則として国内で生産されている製品の輸入は認めないという保護政策をとってきた。この政策はインド市場での競争を抑制し，経済を非効率でハイ・コストなものとし，工業製品は低生産性のため国際競争力を持ちえず，輸出が伸び悩んだ。また，公企業が中央政府と州政府によって次々と設立されていったが，その多くは赤字企業に転落し，これらの企業への赤字補塡が財政負担となっている。その結果，財政収支の赤字が拡大した。これは貯蓄・投資ギャップを拡大させ，それは同義に経常収支赤字の拡大を意味した。

ライセンスによる規制が競争を抑制してきたことは，多くのエコノミストが指摘している点である。インドの輸出が伸び悩んでいるのも明らかである。さらに，財政赤字の膨張が大きな問題であることも確かである。しかし，それが1991年の経済危機の構造的要因であるとするには論理の飛躍がある。経常収支は1980年代を通して悪化しているが，その最も大きな要因は対外債務に対する利子返済である。政府が1980年代に利子の高い商業借款に依存し始めたことに原因が求められるべきである。

ここで，財政赤字増大の原因が重要となる。財政収支のバランスが崩れ始めたのは1979年以降の現象である。公企業の赤字補塡負担だけでは説明できない。1980年代に増大した食糧・肥料補助金を考慮することが必要になる。また，公企業の赤字累積の一要因として，低管理価格での供給（陰の補助金）がある。電力公社の例はその典型である。財政赤字増大の主な原因は，補助金および陰の補助金の増大にある。

経済改革の目的のひとつは，財政赤字が増大する中で政府投資を削減せざるをえず，民間投資に肩代わりさせることである。そのためにはそれまで政府が独占してきた部門への民間の参入を認めるだけでは不十分である。とくに今整備が望まれているインフラ部門では政府投資が重要な役割を果たす必要がある。現に，経済改革以降政府投資の削減によってインフラ部門の実績は落ち込んでいる。

本書が入門書であるという点を考慮すると，以上述べてきた点は論理を単純化するために捨象されたのかもしれない。多様な経済構造をもつインドの特徴を分かりやすく説明するのは難しい。「変わりゆくインド」に焦点を当てた入門書として本書をお薦めしたい。

（アジア経済研究所動向分析部）